酪農自立経営基準の策定に関する調査研究

第1報　吉野川下流地帯酪農の位置づけ

村部幸夫・矢野　明

Ⅰ　はしがき

徳島県の酪農経営は、わが国西南暖地で屈指の主産地を形成しており、その大部分は吉野川下流の水田地帯で成立している。

したがってこの地域の水田酪農は、四国地方ないし西南暖地を代表する経営形態であり、多数の優良事例が調査紹介されている。しかし、その内容についての解析ができておらず、実際的な経営指標としての普遍性にとぼしい。理想的な経営計画は多くの学者や技術者によって理論的に樹立されており、これを利用すれば自立化は可能かもしれない。しかし経営基盤、営農環境の差異などから、それらを直ちに活用することは困難である。そこで当地域に合致した自立経営基準の策定が必要であると痛感し、この調査研究を取りあげた。その方法として、当地域の優良事例について解析的調査を行ない安定経営の諸要因をはあくすることによって自立化の基準を実証しようとするものである。

本報告はまず当地域の酪農経営について、統計的資料に立脚して調査を行ない、その位置づけを行なったものである。

Ⅱ　対象地域

徳島県の農業地帯を区分する場合、吉野川、四国山脈（剣山）および海岸地帯など、地形上から5～6地帯に分けられる。しかしこれは作目によって当然異なるので、稲作、畑作、果樹作、畜産などにより、それぞれ最適の区分が用いられている。ここでは乳牛を対象とするので、その飼育密度および頭数を指標として図1のように地域を限定した。すなわち鳴島以東の吉野川流域市町村で南岸は徳島市、国府町、石井町、鳴島町、北岸は鳴門市および板野郡の全町村を含む2市12ケ町村である。

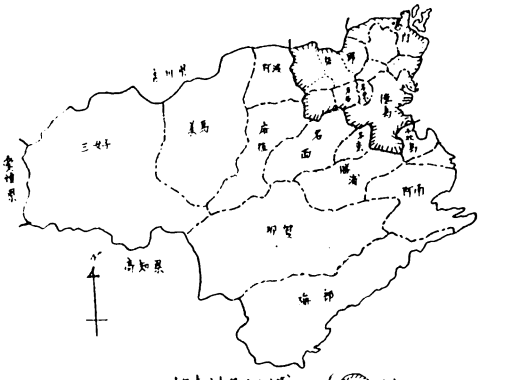

図1　調査対象地域（◯内）

Ⅲ　地域内における経営の概要

(1)　主要作目

下流地域の経営内容は年と共に合理化されつつあるが、兼業化がすすみつつあることは他地区と同じ傾向である。しかし一部においては水田の拡大、果樹園の造成、乳牛の多頭化、にわとりの多数飼育などがみられ、構造改善によるやさい栽培の集団化、あるいは酪農協業などの形態がすすみつつある。一般的には零細経営が多数を占め、その経営は水田を中心とした多元的な形態をなしている。

表1に示すとおり1963年の調査結果より作目別の作付状態をみると耕種部門では水稲、麦類、やさい類（根さい類、葉茎菜類、果さい類）たばこ作の順となっている。果樹ではなし、ぶどう、かき、はっさく、うん州みかんが作付されている。養畜部門では乳牛、にわとりの飼育農家が最も多く県全体からみても下流地帯の農産物の生産量は重要な地位を占めている。

(2)　農家数の変動

対象地域における1965年の農家数は、24,747戸で1955年の26,172戸にくらべると1,425戸の減少であり、その減少率は約10.6%である。また県全体の農家数は74,641戸で1955年より3,725戸減少

表 1 作目別作付面積および販売額

作目別＼面積・金額 区分	面積 対象地域	面積 県計	面積 対県比率	販売額 対象地域	販売額 県計	販売額 対県比率
	ha	ha	%	千円	千円	%
水稲	12,127	29,701	40	2,016,720	3,877,908	52
麦類	7,190	19,691	37	124,837	166,483	64
根さい類	2,055	3,334	62	609,505	662,039	92
果さい類	1,220	1,997	61	498,296	778,201	62
葉茎類	1,335	3,647	37	535,957	797,359	42
果樹類 成園	780	2,706	29	654,681	2,617,451	25
果樹類 未成園	570	2,491	23			
たばこ	592	2,660	22	470,649	2,056,526	23
乳牛	14,657頭	20,850頭	70	—	—	—
にわとり	871千羽	1,843千羽	47	—	—	—

1963年徳島県農林水産業基本調査結果報告による
但し畜産（乳牛.にわとり）は 1964年徳島県畜産要覧による

し10.5%の減少率で対象地域とはほとんど変らないが、地域内では鳴門市の減少は著しく、応神村は逆に増加している。

農家数の減少を階層別にみると地域内および県全体ともに 0.5～1.0haを分岐点に それより下の階層では減少し、上の階層においては増加している。したがって零細農家においては離農傾向がみられ一方では規模の広大が行なわれつつある。

表 2 階層別農家数の変動

区別＼階層区分		総農家数	0.5ha未満	0.5～1.0ha	1.0～1.5ha	1.5～2.0ha	2.0ha以上
対象地域	1965年実数（戸）	24,747	11,271	7,821	3,995	1,231	429
	1955年を100とした指数(%)	94.6	93.7	88.2	104.5	108.8	130.0
県計	1965年実数（戸）	74,641	35,462	25,958	9,469	2,776	976
	1955年を100とした指数(%)	95 2	89.8	95.4	108 2	116.1	172.1

(3) 耕地動向

表3に示すとおり経営耕地面積は県全体からみると 1955年にくらべ、1.5% 増加している。また田、畑別にみると水田は増加しているが畑は減少している。地域内でも田、畑は同じ傾向であるが畑の減少率は高い。特に畑のうち最も減少しつつあるのは桑園で1955年に比較すると1965年には約54%減少している。果樹園は桑園と逆に 382ha であったが1965年では1,123ha増加している。

田畑率からみると水田率73.8%、畑率は26.2%となっている。本県の平均水田率は61.4%であり地域内の水田率はかなり高くなっている。

(4) 酪農

この地区における乳用牛の飼育頭数は、表4に示すとおり 1955年には約 5,400頭で県内飼育頭数の58%を占めていた。これが1965年には約12,000

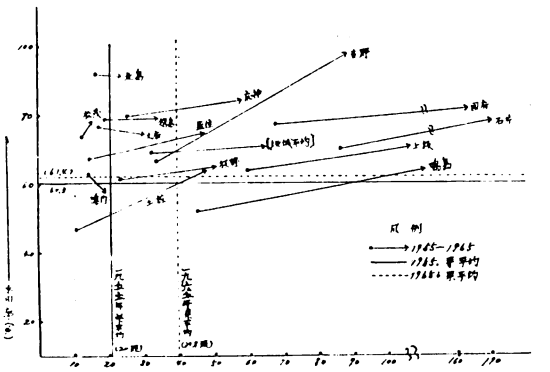

図 2 水田率と耕地100ha当り乳牛飼育頭数の推移
（市町村別）

表 3 耕地面積の動向と田畑率

区分 / 市町村別	耕地面積 (ha)	水田面積 (ha)	畑面積 (ha)	畑のうち樹園地面積 桑園 (ha)	畑のうち樹園地面積 果樹園 (ha)	水田率 (%)	畑率 (%)
徳島市	3,877.3	3,073.5	803.8	2.9	411.0	79.3	20.7
国府町	1,088.7	901.1	187.6	1.0	5.6	82.8	17.2
鳴門市	1,479.7	865.2	614.5	0.9	142.3	58.5	41.5
大麻町	1,034.8	776.2	258.6	6.3	157.7	75.0	25.0
北島町	419.4	383.3	36.1	—	8.4	91.4	8.6
松茂町	541.4	425.9	115.5	—	13.9	78.7	21.8
応神村	357.6	302.1	55.5	—	5.0	84.5	15.5
藍住町	973.4	729.0	244.4	—	18.6	74.9	25.1
板野町	1,024.5	663.6	360.9	22.7	88.2	64.8	35.2
上板町	1,137.2	806.7	330.5	63.1	72.8	70.9	29.1
吉野町	622.0	487.9	134.1	29.2	17.2	78.4	21.6
土成町	1,060.7	686.7	374.0	61.8	109.5	64.7	35.3
石井町	1,529.7	1,250.0	335.3	2.3	10.0	48.1	21.9
鴨島町	1,188.4	760.5	427.9	17.5	63.0	64.0	36.0
対象地域合計	16,334.8	12,056.1	4,278.7	207.7	1,123.2	73.8	26.2
1955年を100とした指数 (%)	97.7	104.3	83.1	46.0	293.7	—	—
県合計	46,071.1	28,283.3	17,787.8	1,531.4	4,509.1	61.4	38.6
1955年を100とした指数 (%)	101.5	103.4	98.7	76.0	325.6	—	—

徳島県の農業（1955年中間センサス結果による。）

表 4 乳牛飼養頭数

区分 / 市町村名	乳牛頭数 1955年	乳牛頭数 1965年	1955を100とした指数
徳島市	763(頭)	1,319(頭)	172.9(%)
国府町	715	1,776	248.4
鳴門市	213	284	133.3
大麻町	153	312	203.9
北島町	73	94	128.8
松茂町	74	81	109.5
応神村	92	208	226.1
藍住町	147	460	312.9
板野町	228	518	277.2
上坂町	687	1,331	193.7
吉野町	199	548	275.4
土成町	111	509	458.6
石井町	1,373	2,933	213.6
鴨島町	576	1,616	280.6
対象地域計	5,404	11,989	221.9
県合計	9,392	18,320	195.1
対県比率(%)	57.5	25.4	—

頭、65%となり濃密化している。そこで耕地 100 ha当りの飼育密度を示すと図2のようである。阿部[1]は1957年と1963年の、都道府県別耕地100 haあたり飼育密度を示しているが、これによると徳島県は1957年16頭、1963年38頭となり全国で最右翼に位置している。前図は年次的に2年新らしい資料であるが、1965年の県平均は40頭、調査地域内の上板、鴨島は100頭、国府、石井は150頭をこえる濃密飼育地帯となっている。

四国の農業地図[2]によれば四国地方における乳用牛の分布は、徳島県の北部を含む瀬戸内側に多く、香川県の平地帯状分布型、愛媛県の平地段畑散在型、高知県の点在型に比べ、徳島県は純然たる密集型(吉野川下流)を示し、四国を代表する平地（水田）酪農であることが判然としている。

IV むすび

この調査結果から、吉野川下流の酪農は本県における代表的な経営形態の一つで、四国を代表する酪農地帯であり、かつわが国屈指の濃密飼育地帯であることが確認できた。

この調査研究をすすめるにあたりご助言いただいた四国農業試験場、香川俊一室長、菅野考巳室長、および資料を引用させていただいた方々に深謝の意を表する。 （文献は26頁へ）